



第32回

時代の潮流を変えた“艇王”

植木通彦

ueki michihiko

ボートレース ーロメモ

競輪、競馬、オートレースと並ぶ公営競技の1つ。モーターボート競走法をはじめとする法令・ルールの下に、プロの選手たちによって行われるレース。レースは6艇によって行われ、水面に設置された2つのターンマークを3周(約1800m)しゴールの着順を競う。勝舟投票券(舟券)の売上のうち、75%が払い戻し金に当てられ、残り25%のうち7%は収益金として自治体が受け取り、18%が賞金、従業員の賃金、公益財団法人日本財団への交付金、モーターボート競走会への委託料などに充てられる。ボートレース場は日本全国に24ヶ所ある。ボートレースの特色の1つに「男女が同じ条件で戦う」ことがある。

ボートレースの世界で、“艇王”^{うた}と謳われ、スキージャンプの葛西紀明、プロ野球の山本昌などと並び称せられるレジェンドがいた。

植木通彦。^{たいく}小柄な体躯と風貌はアスリートというよりも哲学者を彷彿とさせる。

新人時代に桐生で行われたレースで顔面を75針も縫う大けがを負い、その桐生を敢えて復帰戦に選んだ勇者。

生涯獲得賞金総額は、22億6000万円を越え、惜しまれつつ引退後は、レーサーの養成所である“やまと学校”校長として後進の指導に当たり、伝説のモンキーターンのスピリットを伝授している。

そんなボートレース界のレジェンドに、少年時代から現在の校長にいたるまでを語っていただいた。

聞き手／山本浩 文／白鬚隆幸 構成・写真／フォート・キシモト 弦書房「水に舞う不死鳥」より やまと学校提供

おおきく変わった ボートレース界のイメージ

—— 現在、日本モーターボート競走会やまと学校の校長先生というお立場ですが、教育者としてどんな点に留意されていますか？

組織の中で、教育者という仕事をしたことがなくて、プロのレーサーとして20年間やってきました。自分の思いをきちんと伝えるということが今までなく、指導者として教えることが理解してもらえるかどうか、苦勞しましたが、ようやく6年経って、「植木という人間はこんな人なのだ」ということが理解されるようになってきました。技量を上げることも大切なことですが、一番は『ファンあってこそそのボートレース』ということを教えていきたいと常々思っています。

—— 校長先生としては、指導者のグループと訓練生というグループの両方に右足、左足を置くような感じなのでしょうか？

一時的なアドバイスを訓練生にするならば、将来的に役立つものでなければいけません。現場の技術というものは、扱っていてレベルを上げていかなければジリ貧になってしまうので、今は指導者の教育に、ちょっと力を入れている感じです。

—— 校長先生になられて、実際にボートに乗れることはないのですか？

ここ2年くらいは乗ってないですね。今は全国のボートレース場のない地域からも選手になってもらい、その地域にもボートレースを振興していこうとレーサーの応募を受け付けています。全国いろいろなところから選抜して、入学してもらって、やまと学校できちんと指導して立派な選手になってもらう。そして各地域を盛り上げていく。私は、直接訓練生を教える指導者たちとコミュニケーションを密に取り、自分の考えを伝えています。すごく良い雰囲気の仕事を進められていると思います。

—— 全国を回っているということは、中学を卒業する子どもたちとも会うとか、当然その親御さんたちにもお会いすることが多いわけですね。今は、ボートレースの学校の説明会を全国各地でやっていますが、ボートレースを知らない方もたくさんいます。そういう方への啓蒙活動という側面もありますね。ボートレースにとっては、いいチャンスであるといえます。





子どものころ

—— ご自身が、この世界に入った時と比べて20年以上経過しているわけですが、この間のボートレース界の変わりようはいかがですか？

私の現役時代は、かけ足で走り抜けたような20年間でした。ボートレースのイメージも大きく変わりました。今、私は中学校や高校に依頼されて講演に行きますが、もう生徒も親御さんもボートレースに対するイメージが全然違いますね。たとえば、今のボートレースはCMのイメージです。ものすごく斬新なことがよくわかります。インパクトもあるし。私の現役時代は、コアなファンが多かったのですが、今は若い人たちにも人気が出てきて大衆化した感じですよ。

—— 幅広くわかりやすくなったということでしょうか？

そうです。だから、いろいろな所へ行っても「あのコマーシャル見えています」とそこから入るのですね。そうした意味で、私の現役時代とは、スタートラインが違いますね。今、こういう職業についている私にとっては、うれしいことですね。

野球少年が高校2年生でボートレースの世界に足を踏み入れる

—— 話を少し戻しますが、お子さんのころは、どんな子どもだったのですか？

父親が建設業を営んでおりました。小学校の低学年のころは、土日の休みに工事現場に手伝いに行っていたのですが、危ないから2階には上がるな、と言われるくらい「トロイ」子でした。おまえはテキパキしていないから下でゴミでも集めている、と言われた。だから俊敏な子どもではなかったです。

—— 運動のほうはどうでしたか？

もの心ついたころから野球をやっていましたね。最初は町内会でソフトボールのチームに入りまして、中学校は軟式野球、小倉商業高校では硬式野球部で野球をやっていました。

—— 小倉商業というと名門ですね。プロ野球の選手になるとか、甲子園に行きたいとか夢は持っていたのですか？

私のころは、小倉商業も低迷期で、プロ野球の選手になろうとか、甲子園に行きたいとか、そんな夢は見えていなかったですね。サードをやっていたのですが、目標といたら、レギュラーになることくらいですかね。

—— 野球をしていて何か思い出はありますか？

高校2年の最後の試合、たしか相手は直方学園だったと思いますが、8回まで0-6か0-7で負けていました。しかし、最終回に何と同点に追いついたのです。人間というのは団結して力を合わせれば、こんなことも出来るのだ、と思いを新たにしました。結局、その裏にホームランを打たれてしまっただけなのですが、とにかく感動しました。

—— ボートレースの世界に入るきっかけは、どんなことだったのですか？

もともと北九州というところはボートレースの盛んな土地で、若松というところにレース場がありました。私も小さいころから父に連れていってもらっていて、ボートレースにはそんなに違和感がなかった。ちょうど、私の高校2年のころ世の中が不景気で、父の建設会社もその影響を受けました。私は長男でしたので、父の会社を助けよう、家族に楽をさせようという気持ちがありました。当時のボートレースの入学条件が17歳以上、23歳未満だったので、高校2年の私でも試験を受けられたのです。両親や高校の教師には大反対を受けたのですが、1回だけ受けさせてくれと説得して、ボートレースの訓練生の試験を受けました。もし1回挑戦して受からなかったら高校を卒業して就職しようと思っていました。

—— 相当な狭き門だったのではありませんか？試験は、どんな感じで行われたのでしょうか？

入学したのが45人で、受験者は1500人くらいだったと思います。1次が筆記、2次が実技、3次が面接でした。そんなにボートレーサーになりたかったわけでもなく、学生服を着て試験場に行きました。私は秋に受験しましたが、あまり試験のための準備とかは、特にしなかったですね。そんな余裕もなかったし。

—— ということは生まれながらにして、才能があり、それが認められたということですね。

まあ、自分の口からは言えませんが、野球をやっていて、それなりに体力もあったし、団体生活するのに野球のチームワークとかが多少わかっていることなどがよかったのじゃないですか。面接では相当緊張したのですが、6人の面接官の前で、自分の気持ちをしっかり伝えよう、とだけは思っていましたね。

1年間、本栖湖の選手養成所で鍛えられた

—— それで17歳で選手養成所にお入りになって生活が一変したわけですね。

今でも記憶しています。現在のやまと学校の前身「本栖研修所」の住所は「山梨県西八代郡下部町中の倉2927」で現在でもはっきり記憶しています。なぜなら、両親にいっぱい手紙を書いたからです。そうすると父と母から返事が来て、それこそ17歳の少年が涙するような内容です。今みたいに携帯電話とかメールとか、無いころですからね。本栖湖の冬は気温マイナス15度。水が顔にかかると、まつ毛がバリバリに凍るのですよ。でも夏は涼しくて快適でした。

—— 学校の毎日は苦にはならなかったですか？

目標を達成するためには、まず訓練を普通に受けないといけないと思っていましたからね。この訓練をめんどうくさいとか、もうダメだとか、嫌だなと思ったことはなかったですね。目標の通過点だったので苦にはならなかったですね。

—— 鉄の意志ですね。

管理されている中ではありましたが、自分で目標



本栖湖一周マラソン。厳しい訓練も苦痛とは思わなかった



研修所

を立てたのだから、苦にはならなかった。訓練は早朝6時から就寝の夜10時まで。びっりのスケジュール。バタンキューの毎日でした。私はモーターの整備が苦手でセンスがないのですね。手先が不器用で、よく手を切ってしまう、血まみれになっていました(笑)

—— 訓練生の中には苦手なものからは逃げる人がいるといいますが、植木さんは逃げなかったですか？

整備は下手でしたが、真剣に取り組みました。ボートレースの世界に入るとき、レーサーは用意されたボートに乗って走るだけで、こんな作業があるとは思ってもいなかったです。プロペラをハンマーで叩いたり、モーターを整備するなんて考えてもいませんでした。

—— その苦手な整備の部分で、自分が変わったと思えたのは、どの時点だったのですか？

本栖研修所を卒業して、プロのレーサーになってからも整備は苦手でした。だから整備するより調整することに専念しました。モーターというのは部品を変える整備もあれば、与えられたモーターで少しだけ調整してボートに乗ることもできる。こういう風に調整したらこうなる、こういう状況だったらこう調整する、ということのを頭に叩き込んで、あとは経験でカバーしました。自分だけのマニュアルみたいなものを作って、それに従ってモーターを調整する。あえて整備はしない、というポリシーで、なんとか20年戦い続けましたね。

—— 逆にいうと、緻密な選手だったのですね。

どうでしょうか。うちの家内からは細かい性格だといわれますけど。

—— ボートレースの選手には、自然との闘いで「風を読む」とか「水を読む」とかいうこともありますね。

そうですね。ボートレースは、風に影響を受けやすいスポーツですからね。訓練生時代は朝6時に起床してグラウンドに出て乾布摩擦をするのですが、そのときに「今日の風はこうだ。あんまりスピードを上げてまわれないな」とか考えます。今日は波が荒そうだね、とか注意する。水も淡水と海水では、まったく違います。淡水は堅いし海水は柔らかい。淡水だと体重差が影響するので。もちろん、訓練生のころは、そこまでわかりませんが。水深も、だいたい2mくらいなのですが、海のコースだと潮の干満がありますから変化します。レース場には一般の人がプロのレーサーと共に試乗できる“ベアポート”というがあるので、ぜひコースに来て試してみてください。乗ってみるとよくわかりますよ。

—— 訓練中に、そうした実践的なことも学んでいくのですね。

福岡県出身の私は、学校に入ったころは、レース場は県内にある福岡、芦屋、若松と本栖湖ぐらいしか知りませんでした。その後、全国に24もレース場があることがわかりました。また、淡水コースと海水コースがあることも知ったわけです。訓練生時代は主として本栖湖のきれいな淡水で練習したのですが、愛知県の蒲郡と常滑のレース場での訓練があり、その時海水コースも経験しました。

—— 訓練生時代に教官から指導された言葉で、特に印象に残っている言葉はありますか？

まずは5分前精神。いつでも約束の5分前には準備を整えて集合する。それは今でも守っています。そのほかにも“率先垂範”などいっぱいありますね。そうした精神訓みたいな言葉が多く使われ



参観日に父(中央背広姿)と

ていました。今でも時々忘れかけている言葉を思い出して実践しています。

—— 同時に訓練中は食べることも大事だったのではないですか？もちろん、厳しいトレーニングの中で太ってはダメなのでしょうが。

それは職業的なものですね。大相撲の力士が太るために食べるのが商売だ、みたいなことはあります。私たちのころは、体重制限がなくて(現在は体重が50kgを下回るとおもりを乗せて50kgにする)「軽いほうが有利だ」ということで、無制限に減量していた。私は訓練学校にはいるころ57kgほどあったのですが、試験を受けるとき5kgほど減量しました。現役時代で一番痩せていたころは44.8kgでした。

—— それは、また浅丘リ子さんが新体操の選手なみですね。17歳の食べ盛りですよ。食べたくなかったのですか？

コントロールはしているのですけどね。自分も訓練生の時は、きちんと3食食べていました。ところが、減量していると、どんどん胃袋が小さくなってしまふ。一度にたくさん食べられなくなってしまうのですよ。だから現役時代は、1日6回とか7回に分けて食べていました。家族にも、ずいぶん迷惑をかけたと思います。私ที่บ้านにいたときは、たくさん食べたいのに我慢してくれていたのだと思います。それと一般の方と食事を共にすると、私の食べるスピードが遅いので、先方も食事のペースを合わせるのが大変だったようです。ともかく、私はそれだけ競技にのめりこんでいました。



—— 訓練時代の同期の方とは、今でも深い絆で結ばれているのですか？

私たちのころは17歳以上23歳未満というのが訓練生の募集条件でした。同期には社会人を経験された方もいましたし、私みたいに高校を休学したのもいて同期といっても年齢差がありました。みなさんお兄さんの存在で、あらゆる意味でお世話になりました。現役を退いて、いろいろな分野で活躍されていますが、今でも時々食事会などを開催して旧交を温めています。今は門戸を少し広げ、15歳以上30歳未満になったので、訓練生の年齢差も大きくなっています。

プロデビュー、 初勝利にも淡々とすごす

—— そして訓練生の1年を経て、試験をクリアされて1986年にデビューされるわけですが、初めてのレースの成績はいかがでしたか？

「着順は、しっかり憶えています。5着、4着、2着、6着、4着、2着でした。最後の2着は写真判定で接戦負け。このとき、1cm、2cmが大事なのだと痛感しました。そのとき、勝っていれば新人初勝利恒例の“水神祭”でコースに落とされる儀式があるのですが、初シリーズはお預けになりました。距離で15cmほどの負けですが、とにかくそれが大きいのだ、と悔しい思いをしました。緊張してい



整備日のモーターの組み立て

て航跡とかは覚えていないのですが……。

—— まわりは経験豊富な先輩ばかりですよ。蹴落とされるとか、気が引けるとかはなかったですか？

そういったものはなかったです。もうプロになった以上、新人もベテランも同じ、というのがボートレースの世界です。ただし、新人は、いろいろと先輩の雑用とかもありますから、遊んでいる時間はありませんでした。ある意味、それが良かったのですが。

—— 新人がやるべき仕事とは、具体的にどんなことですか？

具体的にいきますと開催中の先輩の身の回りのお世話ですね。タバコとかコーヒーを用意する。先輩からはレーサーのしきたりや整備のやり方などアドバイスを受ける。まあ、良い循環だと思います。先輩の個人マネージャーみたいなものですね。レースのときは3人部屋に泊まるのですが、一番後輩がドアに近い場所に寝て、朝7時になったらコーヒーを入れて先輩を起こす、そんな役わりでした。

—— それでも勝負のかかったプロの世界ですよ。勝負以外のところにエネルギーを使うのも大変だったのではないですか？

プロ同士なので、本来は先輩から物を教えてもらうなんてことは、ゼロのはずです。ところが右も左もわからない新人を一人前にするには、どうしてもそうしたしきたりも必要です。ボートレースの賞金総額は決まっています。1600人のレーサーが競うわけですから。その中で教える、教わるという形で先輩後輩で受け伝えなければいけないので、こうしたやり方も1つの方法であると思います。私は先輩のお世話をしたのは苦にならなかったです。

—— 初勝利の記憶はありますか？ うれしかったでしょうね。

12月の2節目だと思うのですが、「うれしい」というよりか「これでプロになれた」という感じでした。これから本当の意味のボートレーサー人生が始まるな、と思いました。だから自分としては淡々としていました。「親父、勝ったよ」みたいな風にはなれないのです。勝ったら次の勝負をどうしようと、考えるタイプでした。1つの目標を達成したのだから



艇をおろす植木通彦。顔の傷は近付いても気づかぬほど見事に整形手術が成功した

喜ばばいいんじゃないか、とも思うのですが、ドライなんですよ。人間としては、面白い人間とはいえないかもしれません。

ボートレーサー人生をかえる大ケガを負う

—— そんな順調なプロデビューを果たした植木さんに大きな転換期がきます。1989年の桐生で大ケガをされていますね。ケガをされたときのレースの記憶は鮮明ですか？

全部憶えています。その当時は自分の成績が一気に上がってきて楽しくてしょうがなかったのです。レースに出れば結果が出るシーズンでした。だから危険に対する意識などが、どうしても薄れていたころでした。結局は“まくり”状態で、他のボートの航路を邪魔した形になったのです。転覆したときに「あっ、やっぱりケガしたか」と思う自分がいたわけです。顔をケガすることになるのですが、幸いにも救助艇が助けに来てくれるのが見えました。見えていたから「目は大丈夫なのか」と思いました。しかし、救助員の方から後から聞いた話では、「もう、顔じゃなかった」と言われました。その後、緊急手術で75針縫いました。

—— それは、隣のボートのプロペラ(スクリュー)で、やられたわけですか？

私が先行して他の5艇の前でこけたので後続艇のプロペラだったようです。事故の責任は、すべて私にある。よけようと思ってハンドルを切った後続艇の方も避けられなかった。その方にも申し訳ないな、と思いました。

—— その瞬間にそう思ったのですか？

いえ、入院してからです。局部麻酔の手術だったので、手術の最中もすべて憶えています。前橋の病院に搬送されたのですが、たまたまドクターが九州の方だったのですよ。「これが験でこれが目尻でしょ」と先生方が話しているのが聞こえました。それを聞いて「先生、大丈夫ですか？」と私が聞いたら「少し静かにしていて」と怒られたほどです。なにしろ自分の顔は鏡でもないと見えない。自分では、そんなに重篤な状態になっているのかわかりませんでした。だからフライングをしたのではないかと気になって仕方なかった。手術は無事に終わったのですが、顔は腫れて包帯でぐるぐる巻きです。

—— しかし、そんなに酷いケガで、よく失明しなかったですね。

目の上にプロペラが当たっていたようですね。ヘルメットでプロペラが割れていたみたいですが、でも、ほんの数ミリずれていたら失明したかもしれません。ともかく手術後は験が上も下も腫れていたから、まったく見えませんでした。何日か経ってか



植木通彦のモンキータン(唐津競艇場)

ら腫れが引いて光が見えたときは、ほっとしました。でも鼻の骨が無くなっていて、前橋から北九州に転院したあと、頭蓋骨の骨の一部を鼻に移植する手術をしました。そんなわけで、復帰には時間がかかりました。幸いにも若かったので回復力もあり、握力が少し落ちたくらいでリハビリは順調にいきましたね。休んでいたのは5ヵ月くらいでした。

あえてケガをした 桐生のボート場で復活。 その後モンキーターンで 一世を風靡する

—— それで、復帰したのがケガをした桐生だったそうですね。

ドクターからは「走るのは植木さん自身の問題。もう身体的には全く問題なし」と言われて復帰のタ

イミングを探していたのです。そうしたら桐生から出場の斡旋がきて、当然私はパスしようかと思いました。復帰戦は地元・福岡県にしようとしたら、父が「桐生から走ったらどうか」と言ってきたのです。この人は鬼か、と思いましたよ。でも、よく考えたら逃げるのは嫌だったし、桐生でケガをしたときに、たくさんの方にお世話になったので、お礼の意味でも桐生を復帰戦にするのも良いかと思い、桐生から走ることにしました。手術をしていただいた先生にもお礼をできたとし、よかったです。でも桐生のコースに足を踏み入れたときは、少し恐怖感もありましたが、後に桐生で大きなレースで勝っているの、やはり最初に走って恐怖感を払拭できたのはよかったです。

—— それで90年代に入ってコンスタントに成績を残されています。そのころ植木さんがモンキーターンという技術を生み出され勝ち続けるわけですが、それはいかにして生み出されたのですか？ そのころすでに先輩でモンキーターン旋回をしていた人がいました。ボートには本来、正座に近い形で乗るのですが、最終回の旋回を速く回ろうと腰を上げる人がいたのです。これは、相当リスクで転覆の可能性も増える。どうしても前のめりになりますからね。そこで、私はリスクを減らすために腰を浮かす時に重心を後ろに下げるスタイルで試してみたのです。ちょうどスキーのクラウチングスタイルですね。私と同じ世代のレーサーがやり出したのですけれど、たまたま、私がモンキーターンでSG競走に勝ったので、それで「植木がモンキーターンで勝った」ということになったのでしょう。ただ私は、旋回し終わった後、立ち上がりのスピードを上げるため、重心を前方にかけた。それだけ脚には負担がかかるわけですが。

—— 重心が高い分、転覆の危険性はずいぶん高くなりますよね。

そうですね。ちょっと波が来ただけで転覆する危険性がある。スピードを出しても、左に重心をかけ、バランスを失わないように注意しました。

—— 技術の習得には時間がかかったのですか？ それほどでもなかったです。ともかく人のいないところで技を磨くよりも、人が見ている前の実戦で技を磨くほうが技術の取得は早いと思います。



SG初優勝、
総理大臣杯を手にした



プロボーズを宣言して優勝した全日本選手権の
第1マーク(1号艇が植木通彦)



賞金王決定戦

—— そのころのライバルといたら誰になりますか？

かっこうを付けるわけではないですが、ライバルは自分でしたね。この人にだけは負られない、ということはありませんでした。常に植木の勝利を信じてくれているファンがいたので、その人のために勝たなければ、という心境でボートを走らせました。あの人に負けなければ他の人に負けてもいい、なんて心境にはなれませんでした。

—— 何か勝つためにゲンを担ぐとか、勝つためのルーティーンとかはありましたか？

心掛けたのは睡眠でした。起きていると言わなくてもいいことを言ってしまったりするので、とにかくひたすら睡眠をとりました。あと、レース場に行ったら、とにかく動作をゆっくりすること。歩くのもゆっくり、食事もゆっくり。自分のテンションが上がると、どうしても所作動作が速くなりますからね。ゆっくり動くことを心がけました。

早めに引退、後進に夢を託す

—— どのレースの勝利が1番勝ってうれしかったですか？

正直、すごくうれしかったという勝利はないですね。勝ったことよりもお客さんが喜んでくれることが一番うれしかった。だから、勝ったレースでもビデオを見たことは一度もありません。自分の航跡はすべて頭の中のファイルにインプットして、次回からのレースの参考にしていました。表彰式で泣いたのは1回だけです。しばらくSGに勝てていな

かった2001年、グランドチャンピオン決定戦に勝ったとき。重賞レースで4年ぶりの勝利で、そのときは表彰台の上で泣きましたね。

—— 毎年、これだけは心がけていたことはありますか？

年末に賞金王決定戦という大きなレースがあり、当時毎年賞金総額1億円以上の選手しか出場できないので、10月くらいまでに賞金総額1億円にしようと自らにノルマを課していましたね。ファンの期待に応えるために、どうしても出場したいレースでした。

—— 植木さんがボートレース界で高い評価を受けていた2007年、突然引退を表明されました。あまりにも早い引退といわれましたが、どういう心境だったのですか？

ケガをしたのが20歳のときで、復帰するには相当な覚悟が要りました。怖さもあったし、再びケガをしたら、と思い復帰にはエネルギーを要しました。そこで20年間は頑張ろうと誓ったのです。ちょうど20年目がきたし、そのころ握力も弱ってきていて、その他の私をとりまく状況もあり、「これ以上続けても周りの方に迷惑をかけてしまう」と自分で判断しました。まだ、グランドスラムで1つだけ取れていないものもあり、「まだまだ走れるよ」と言ってくださった方もいたのですが「まだまだやれる」と言われるうちに辞めるのが華かな、と思いました。ちょうど永年表彰というのがあり、そこに全国からマスコミ関係者の方も集まるので、そこで現役引退を発表しました。私の引退のために、わざわざ集まってもらうのも大変ですから。



笑顔の引退会見



ラストラン(若松競艇場、2007年11月10日)



やまと学校にて指導にあたる

—— 引退後にやまと学校の校長先生を引き受けるのは1年間のブランクがありますが、その理由は?

高校を休学そして中退してボートレースの世界に飛び込み、20年間やってきました。だから、ほとんど普通の世界を知らなかったのです。新聞に記事を書く仕事をしたり、日本財団で自動車を贈呈する業務をお手伝いしたりして、徐々に社会人としてのスタートは切れたと思います。財団の笹川陽平会長ともお話す機会があり、その中で「ボートレースができるのもファンあってのお蔭だ」と改めて痛感しました。ちょうどそのころ、やまと学校校長就任のお話があり、笹川会長とお話したことを後進の若者に伝えていかねばと思い、校長の職をお引き受けすることにしました。最初にお話したように、ボートレース振興のため、今は全国をたびまわっているところです。

日本プロスポーツ大賞 受賞式での悔しい思い出

—— 4年前の8月にスポーツ基本法というものが施行されて、スポーツをする人の権利を守るため国が何をすべきかなどが定められましたが、日本のスポーツにとって世界の中で変わってきたようなことは感じられていますか?

ボートレースがスポーツかどうか、ということは現役時代から考えていました。1993年に日本プロスポーツ大賞の功労賞をいただけるというので、受賞式に出席しましたが、非常に肩身の狭い経験をしたことがありました。ちょうどサッカーのJリーグが始まった年で、大賞はサッカーの三浦知良選手でしたが、私とは拍手が違い、カメラマンのフラッシュの数も違いました。その年、私は公営競技初の獲得賞金2億円でした。それでも社会の注目度はサッカーとかプロ野球の選手が勝っていました。ちょうど競馬の武豊さんも出席されていて「やっぱり公営競技はダメですね」などと話し合ったことを覚えています。あれから22年、ボートレースもCMや大衆化によって取り巻く環境が激変しました。もし今、選手が表彰式に出るときは、胸を張って出て行ってほしい、我々も選手諸君が堂々と参加できるようにしてあげたいと思っています。

東京オリンピック・ パラリンピックに向けての ボートレースの構想

—— 2020東京オリンピック・パラリンピックに対しては、どんなことを考えていますか?

これまでは正直、ボートレーサーにとっては、オリンピックがどこで開催されるかということより、自分たちのレースのことで頭がいっぱいでした。考える余裕はなかったのです。ところがつい最近、自分の娘がオリンピック・パラリンピックのボランティアとして参加したいと言ってきたのです。そのとき、父として何か考えないといけないなと思いました。ボートレースとしても全国に24ヶ所も環境の良いレース場を持っているので、参加する各国の練習所につかえないだろうかとも思っています。



やまと学校の校長として

—— 風、水、流体力学など、何かセーリング、ボート、カヌーなどの強化にボートレースのノウハウが関与できることはないのでしょうか?

自分は養成訓練という立場から、オリンピック選手の強化がどうなっているのか、非常に興味があります。特に足腰の鍛錬を知りたいと思っています。やはり我流ではダメだな。他のスポーツがどんなトレーニングをしているのか知りたいですね。そしてそれを取り入れていきたい。そういう意味では、オリンピックの盛り上がりの中、お互いのノウハウを交換することを、この機会にやってみるといいですね。選手、訓練生が、まずケガをしない身体作りですね。そうした交流をオリンピックに向けてやれたら良いなと思っています。

—— レーサーとして、そして指導者としての貴重なお話しをお伺いすることができ、ありがとうございました。今後のご活躍をお祈りいたします。

1910
明治43

日本で最初のモーターボートが
石川島造船所にて製作される

1931
昭和6

第1回船外機艇競走大会、隅田川にて開催
日本で最初に開かれたモーターボートレースと
されている

1945 第二次世界大戦が終戦

1947 日本国憲法が施行

1950
昭和25

日米対抗のモーターボートレース、
神奈川県逗子海岸と江戸川にて開催
これが現在の競艇の起源となる

1950 朝鮮戦争が勃発

1951
昭和26

社団法人全国モーターボート競走会連合会設立
1951 安全保障条約を締結

1952
昭和27

モーターボート競走法成立
足立正氏、社団法人全国モーターボート競走会
連合会初代会長に就任
公営競技としてのボートレースが世界で初めて
大村ボートレース場にて開催
4月「大村ボートレース場」が長崎県にオープン
7月「津ボートレース場」が三重県にオープン
7月「びわこボートレース場」が滋賀県にオープン
9月「尼崎ボートレース場」が兵庫県にオープン
10月「丸亀ボートレース場」が香川県にオープン
11月「芦屋ボートレース場」が福岡県にオープン
11月「若松ボートレース場」が福岡県にオープン
11月「児島ボートレース場」が岡山県にオープン

1953
昭和28

第1回全日本選手権競走、
若松ボートレース場にて開催
日本モーターボート選手会連合会を結成
4月「三国ボートレース場」が福井県にオープン
4月「鳴門ボートレース場」が徳島県にオープン
7月「常滑ボートレース場」が愛知県にオープン
8月「浜名湖ボートレース場」が静岡県にオープン
8月「唐津ボートレース場」が佐賀県にオープン
8月「徳山ボートレース場」が山口県にオープン
9月「福岡ボートレース場」が福岡県にオープン

1954
昭和29

6月「平和島ボートレース場」が東京都にオープン
6月「多摩川ボートレース場」が東京都にオープン
10月「戸田ボートレース場」が埼玉県にオープン
10月「下関ボートレース場」が山口県にオープン
11月「宮島ボートレース場」が広島県にオープン

1955
昭和30

笹川良一氏、社団法人全国モーターボート
競走会連合会第2代会長に就任

第1回モーターボート記念競走、
大村ボートレース場にて開催
日本モーターボート連盟創立
8月「江戸川ボートレース場」が東京都にオープン
8月「蒲郡ボートレース場」が愛知県にオープン
1955 日本の高度経済成長の開始

1956
昭和31

国産モーターボートが輸出される
6月「住之江ボートレース場」が大阪府にオープン
11月「桐生ボートレース場」が群馬県にオープン

1957
昭和32

第1回関東大学対抗モーターボートレース開催
第1回東西対抗モーターボートレース開催

1958
昭和33

第1回学生モーターボートマイルトライアル、
戸田競艇場にて開催

1960
昭和35

社団法人日本モーターボート選手会発足

1961
昭和36

第1回東京～大阪間太平洋
1000kmマラソン開催
3日間にわたり14隻が参加、5隻が完走し、
ヤマハが優勝を果たす

1962
昭和37

財団法人日本船舶振興会発足
第1回東京ボートショー、東京都体育館にて開催

1963
昭和38

財団法人日本モーターボート協会設立

1964 東海道新幹線が開業

1966
昭和41

第1回鳳凰賞競走、
平和島ボートレース場にて開催

1968 植木通彦氏、福岡県に生まれる

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1973 オイルショックが始まる

1974
昭和49

第1回笹川賞競走、
住之江ボートレース場にて開催

1976
昭和51

この年のボートレースの売上が初めて
公営競技のトップとなる

1976 ロッキード事件が表面化

1978 日中平和友好条約を調印

1982 東北、上越新幹線が開業

1986
昭和61

第1回グランプリ競走(賞金王決定戦競走)、
住之江ボートレース場にて開催

1987
昭和62

1986 植木通彦氏、福岡競艇場にてデビュー

第1回女子王座決定戦競走、
浜名湖ボートレース場にて開催

1989
平成元年

倉田栄一氏、津ボートレース場にて
史上初の通算3000勝を達成

1989 植木通彦氏、桐生競艇場でのレース中に
転覆し重傷を負う

1990
平成2

財団法人モーターボート競走近代化
研究センター発足

1990 植木通彦氏、唐津競艇場にて
開催された、新鋭リーグ戦で初優勝を飾る

1991
平成3

第1回グランドチャンピオン決定戦競走、
住之江ボートレース場にて開催

1992 植木通彦氏、福岡競艇場にて開催された
地区選手権競走にて初のGI優勝

1993 植木通彦氏、戸田競艇場にて開催された
第28回総理大臣杯競走でSG初優勝

1994
平成6

笹川陽平氏、連合会第3代会長に就任

1995
平成7

北原友次氏、江戸川ボートレース場にて
ボートレース界最多勝の3089勝を達成

1995 阪神・淡路大震災が発生

1996 植木通彦氏、戸田競艇場にて
開催の賞金王決定戦に出場し、
公営競技初の年間獲得賞金2億円
レーサーとなり、そのニュースは翌日の
デイリースポーツの表一面を大きく飾った

1997 植木通彦氏、常滑競艇場にて開催の
笹川賞競走で優勝、
5年連続SG優勝を達成

1997 香港が中国に返還される

1998
平成10

第1回競艇王チャレンジカップ競走、
平和島ボートレース場にて開催

2000
平成12

第1回競艇名人戦競走、
住之江ボートレース場にて開催

2002
平成14

第48回モーターボート記念競走、
SG初のナイトレースで開催

2003
平成15

冬季ナイトレース 2003Xマス&FINALナイト、
蒲郡ボートレース場にて開催

2006
平成18

ボートレース界4番目となる
住之江ボートレース場のナイトレース、
住之江シティナイト開始

2006 植木通彦氏、尼崎競艇場にて開催された
競艇ニュース杯優勝
通算1500勝を達成

2007
平成19

法改正を受け、財団法人日本モーターボート競走
会設立発起人会開催

財団法人日本モーターボート競走会設立

2007 植木通彦氏、引退

2008
平成20

都府県モーターボート競走会及び連合会の解散

2008 植木通彦氏、ボートレース
殿堂入りを果たす

2008 リーマンショックが起こる

2009
平成21

皆川浩二氏、財団法人日本モーターボート
競走会2代目会長に就任

ボートレース界5番目となる丸亀ボートレース場の
ナイトレース、ブルーナイト開始

2011
平成23

財団法人日本モーターボート競走会、
ロンドンオリンピック日本代表選手団に協賛

2011 東日本大震災が発生

2012
平成24

財団法人日本モーターボート競走会、
公益法人制度改革に伴い
一般財団法人日本モーターボート競走会に変更

2012 植木通彦氏、日本で唯一の
ボートレーサー養成学校「やまと学校」
校長に就任

2013
平成25

46歳以上の選手が出場する「匠シリーズ」新設
一般競走の年間シリーズ名称を、

登録6年未満の男子選手を対象とした
「ルーキー・シリーズ」、

登録16年未満の女子選手対象とした
「ヴィーナス・シリーズ」に決定

2014
平成26

「忘れないで!311」各地のレース場で
募金イベントを実施

(日本財団東日本大震災支援基金へ協賛)

「SG審判員制度」を導入 全SG・プレミアムGIを
同じ審判員が判定

小池保夫氏、一般財団法人日本モーターボート
競走会3代目会長に就任



子どものころ



研修所



本栖湖一周マラソン。厳しい訓練も苦痛とは思わなかった



参観日に父(中央背広姿)と



艇をおろす植木通彦。顔の傷は近付いても気づかぬほど見事に整形手術が成功した



整備日のモーターの組み立て



プロポーズを宣言して優勝した全日本選手権の第1マーク(1号艇が植木通彦)



モンキーターン



SG初優勝、総理大臣杯を手にした



賞金王決定戦



植木通彦のモンキーターン(唐津競艇場)



やまと学校にて指導にあたる



あたたかいファンの声援に涙がとまらなかった



ラストラン(若松競艇場、2007年11月10日)



笑顔の引退会見



やまと学校の校長として



植木通彦